2001-29

『蔵前工業会誌』 H13.11.12月号第959号 p8-13 社団法人 蔵前工業会 2001.11.15発行

講　演

国際化の中の東京工業大学

―平成13年6月7日開催の神奈川県支部講演会より抄録―

東京工業大学大学院社会理工学研究科教授 橋 爪 大 三 郎

ただいまご紹介いただきました橋爪大三郎です。

私は社会学が専門，文系の出身ですから，こちらの卒業というわけにはいかなかったので，別の大学を卒業しております。私が大学にいたころは学生運動の真っ最中で，何回も吉本隆明さんの講演に行きましたし，10年ぐらい前にはある雑誌の座談会で吉本さんご本人とお話をするチャンスもあって，東工大に勤めていると申しましたら，「東工大には昔こんな先生がいた，どうしていらっしゃるかな，講義はとてもよかった」と非常によく覚えていらっしゃいました。東工大からこういう思想家が出ています。そういう大先輩の弟子と思っていたところ，ご縁があって，こちらで働くことになりました。大変喜んでおります。

はじめに

今日いただきました題は，「国際化のなかの東京工業大学」というものです。去年，中国に千野理事長と一緒に行くこともできましたし，何かと外国とご縁があるということで，私自身の体験も交えながら最近の東京工業大学の状態を国際化の観点から少しお話ししてみたいと思います。

まず，「国際化とは何か」ということですが，これは情報が移動する，人が移動すること。「グローバル化」とは制度が各国で一致していくこと，こういう流れがどんどん進んでいくことではないかと思います。江戸時代を考えてみますと，情報はほとんど来なかった。人の移動は禁止され，日本国内の制度と外国の制度は全然違っていて，日本には大学すらなかった。こういう状態から出発したわけです。当時の日本の政治家，思想家，法律家，科学者にはいろいろな人がいたと思いますが，そのときの覚悟たるやいかばかりでありましょう。外国の情報はまったく入ってこない。しかし，黒船をはじめとしていろいろな圧力がある。ここからスタートしていったわけです。それ以来，一歩一歩国際化の道を進んできたのだと思います。

情報の移動

私が大学院に進学したのは1972年です。このころはちょうどコピー機が大学の各研究室に入るかどうかというころでした。ですから，発表用のレジュメのようなものは配ることはできて，授業ができますが，それ以外に複写をしようと思いますと，エレファクスとか，ゼロックスで大変値段が高く，1枚50円，70円しました。学生がゼミに使うことはほぼ不可能でした。そこで，どういうときに使うかというと，例えばマックス・ウエーバーを研究しようと思いますと，その本を大事に借りてきて，大事なところだけコピーをとる，こういう状態でした。その前はどうやって研究していたのかと古い先輩に聞いてみたら，「君，研究室というのはね，万年筆の音がサラサラ，サラサラとするところなんだよ」，というふうに教えてくれました。どういうことかといいますと，まず大学ノートを買います。大学ノートを買って，書架にある大事な洋書を机の上に広げて，左目で洋書を見て，右目でノートを見て，同じ量の字配りでサラサラと筆写していくわけです。筆写する以外に本を複製する道はありません。ですから，朝早く研究室に行って，今日は本を15ページ筆写したぞ。こういうことで何週間かかかりますが，1冊筆写して，ついでに内容が大体頭に入るわけです。私は幸いそういう経験は1回もありません。というのは，エレファクスで1枚15円でコピーができるようになりましたから，最初は人類学の研究科に行ったんですが，理学部の人類学科に遠征して，1930年ごろの雑子を理工学科に持って来てコピーして，また返して，こうやっていました。一度に3冊しか借りられません。また行って往復して，たくさん利用して全部読める。そういう研究の方法ができるようになったのは，コピーが来てからです。1970年ごろからです。コピーが入る前は本のあるなしがやはり勝負になります。これも聞いた話ですが，文科系の場合，丸善でだれが一番早く買うかが勝負でした。入荷する時期は決まっているわけですから，主任教授か誰かがいち早く駆けつけて，棚にある本を全部引きずりだして，「君，これを研究室に届けてくれ」と頼んでしまうんです。地方の大学の先生方は一月に1回やってくるなんてペースでは間に合わないんです。まず，洋書を押さえてしまう。そして予算のつく限りそれを買って，研究室に入れてしまう。まず情報源を押さえるんです。ほかの人が反論しようにも議論ができない。こうやって東大の優位が維持されていた時代があります（笑）。こういう状態では情報の移動は微々たるもので，国際化でも何でもないんです。

人の移動

次に「人の移動」ですが，人の移動もなかなか難しいものがあったと思います。留学生の数も非常に限られていました。明治の頃なら，東大とか国立大学の助教授になると，1年か2年留学して帰ってきたら教授だ，そういう慣行だったと思いますが，非常に限られた人数の人しか留学できませんでした。

私には吉本隆明さんのほかにもう一人先生がおりまして，小室直樹さんです。小室直樹さんはいま70ぐらいと思いますけれども，若いころに留学しています。軍国少年だったのに，戦争で負けてしまった。これは原爆がないからだ。京都大学の湯川教授のところで原爆を作って，アメリカともう1回戦争しようと固く決意を固めて，京都大学に入ってみたら，京都大学では原爆を研究していないということがわかって，とてもがっかりした。それで，寝転がって経済学の本を読んでいたら，数式が物理学とまったく同じだ。やはり日本は理工系の学問はもとより，経済学，これを立て直して経済大国になるんだ。こういう決意で経済学に転向します。それで，阪大大学院に入った。阪大は当時，理論経済学のメッカで，名だたる方々が大勢いらっしゃったんです。そこでしごかれて，「お前，アメリカに行ってこい」，こう言われて，フルブライトに合格し，横浜から氷川丸に乗ってアメリカに渡った。そして，びっくりしたのは，アメリカは毎日パーティーのようだ。アイスクリームは食べ放題。ビフテキも食べ放題です。ひどいカルチャーショックを受けます。そういう時代でした。そのころから見ますと，留学も大衆化しました。

私は一昨年から去年にかけてアメリカにいましたが，アジア系の人が大変多いです。ハーバードでもたくさんアジア系の人がいました。さっそうと歩いていて，カッコいいのは中国人です。中国人は中国政府から派遣されるか自費で来るわけで，大変な秀才のなかのさらに優秀な人がアメリカに来ていますから，見るからに学力があるし堂々としている。次に，少し悠々としていてハンサムだな，センスいいなというのは，韓国人です。韓国人は

英語もできるし，女性にもてるし，優秀な人がたくさん来ます。それから，何かアジア人が群れていて，勉強はそっちのけでぐだぐだ遊んでいるとか，そういう感じだと間違いなく日本人なんです（笑）。日本人の大学教員は向こうに派遣されても，まず英語がわからない。文系の学問は実験や数式もないし，言葉が通じないと，まったくどうしようもないわけです。そこで集まって飲んだり…そういうふうに堕落しているわけです。

グローバル化

さて，グローバル化です。日本の大学の変化としては文系でも博士号を要求する，それから博士号を出す基準として，査読ジャーナルをパスした論文が二つなければいけないとかいった，こういう習慣が入ってきました。

これは東大の，例えば文学部あたりの明治以来の習慣と大変違います。自慢ではありませんが，東大の社会学科というところは，私が入ったところには10年前に博士が一人出た，次の博士は10年後だろうと言われていました。大体20年に１回博士が一人出る。東大文学部の場合は冥土の土産と言いますか，高齢の功成り名遂げた大学者が最後に学位請求するのが正しいわけで，30，40歳の若造が博士号などとは生意気だという考え方ですから，アメリカのPh.D.になじまないんです。

ところが，1972年，私が大学院にいるときに外国から社会学科に留学生が来ました。そこで問題が起こったのは，外国の留学生がぜひ博士号を出してくれと言ったんです。ところが，今までの習慣ですと出すことはできません。結局，出そうということになって出したんです。そうすると基準が変わってきます。今までのドイツ式の博士号ではなくて，アメリカ流のPh.D.だから，28才で卒業するときは必ず博士号をとりなさい。いまは日本人に対してもそういう指導になりました。日本の大学の考え方がガラッと変わったわけです。これが国際化です。

東工大の国際化

東工大でも非常にたくさん博士を出していますが，それは東大のような悪い習慣がないおかげで，大変結構なことだと思います。最近の数字をご紹介します。東工大の国際化ですが，現在，外国人留学生の在籍者数はほぼ750人ぐらいの水準で推移しています。５，６年前に急に増えたのです。これを多いと見るか，少ないと見るかですが，この数字は博士課程，修士課程の学生，学部生，それから研究生を全部合わせた数字です。日本人を含めた全学生に対する割合は８％と９％の間です。これだけの規模の大学で８％から９％の留学生を擁しているのは，日本で一番比率が高いと思います。東工大は，日本で一番高い割合で，外国人の学生を受け入れている。外国人留学生の増加が，東工大で起こっている国際化の第１です。

２番目ですが，国際大学院というものができました。これは1993年に全学的な努力によってできたのですが，日本で初めての大学院で，英語で授業を受け，英語だけで卒業できる。日本語を勉強しなくても日本に留学できるというシステムです。これは英語圏や，日本に今まで縁がなかった国々からの留学生をもっとどんどん受け入れたいという趣旨だと思います。私の所属している価値システム専攻は，まだ国際大学院に参加していないので，専攻で英語の授業を４コマ開き，学生を受け入れるということがスタートしていません。方向としてはこれは正しい方向だと思います。

３番目に，海外でも交流協定が結ばれ世界のさまざまな大学といろいろな交流が進んでいます。個々の専攻レベル，あるいは研究室レベルの交流も盛んです。学科単位の交流もあります。学部単位もあります。大学全体もあります。小さなところから積みあげて，大学レベルの交流協定が結ばれているところが，去年の数字で88大学ではないかと思います。

ちょっと自慢すると，私はそのうちの一つの大学，シドニー工科大学というところと協定を結ぶにあたって，頑張ってお世話した覚えがあります，たまたま５，６年前，オーストラリアに１週間ほど旅行するチャンスがあり，講演をした先がシドニー工科大学でした。シドニー工科大学はそのころ，教育大革命を行なったんです。シドニー工科大学というのは就職重視なんですが，卒業生の評判を各企業に聞いてみました。多くのビジネスマン，経営者の方々のお返事は，学力はおおむね結構である。だが社会性が足りない。会社に入ってからうまくコミュニケーションができない。外国人と付き合えない。そういう能力が足りないので，そういう能力を伸ばしてください。こういった要求が多くあったんだそうです。そこで学長が，「そうか，それなら教育改革をしてしまおう」と決断したんです。副専攻を作って，文系の科目を副専攻で学ばせる。大規模な海外留学プログラムもスタートさせました。卒業年時に300人から400人の学生を外国に派遣して，半年間の留学，プラス，半年間のインターンシップの経験をつませる。東工大とも協定を結びましてから，毎年１人か２人のオーストラリアからの学生が来ます。社会工学とかの学科で受け入れて，半年勉強したあと，日本語のよくできる学生ですが，インターンシップで一般の企業で働いて，それで帰国して卒業します。卒業した後はその経験を生かして，日系企業とか，そういう関係の会社に就職することを考えているわけです。

東工大はこのように量の面でも，質の面でも，日本でほぼトップを切って国際化が進んでいると思います。私の研究室はなるべくたくさんの海外の優秀な方々に来ていただこうと思って，延べ数ですが中国の留学生３名，バングラデシュの留学生１名，韓国の学部留学生が１名います。

学部の留学生の仕組みを説明しますと，一昨年からYSEPという新しいプログラムが始まりました。何の頭文字かというと，Young Scientists Exchange Programだったと思います。学部の４年生を，東工大の場合ですと数十人ですが，世界各国から招待して，１年間の体験プログラムを学び，卒論も書いてしまうというものです。

それから，客員の研究者の方々にもいろいろ来ていただいています。過去の客員には天津社会科学院の王輝院長に来ていただきましたし，ハーバード日本研究所のA・ゴードン所長にも来ていただきましたし，いろいろそういう交流を深めています。私の指導する学生の約半分が海外の留学生です。そして，着いた当座は日本語はあまりできませんので，ゼミは英語，日本語の両方を使うという状態にならざるを得ません。

２番目に私が個人的にやっていることは，中国短期留学です。昔１年生の講義を持っていたとき，何でもいいから研究してごらんと言ったら５，６人が中国を研究するグループを作りました。「先生，資料を読んでもなかなか中国のことはわからないです」と言っているので，私はたまたまその年，１週間ほど中国に行く予定がありましたから，「そうかそうか，もし君たちが旅費を自分で出すのなら一緒について来てもいいよ」と言ったら，喜んでついて来たんです。それで，天津や上海に連れて行ったところ，学生たちの反応が非常に良くて知識を貪欲に吸収してくれた。これで理工系の学問を勉強する方針が立った，中国に行ってみたら科学がこんな状況，技術はこんな状況，自然環境はこんな状況で，こういうさまざまな国が地球上にあるのだから科学技術はやることがまだ多い，こんなふうに感じてくれました。これは１回ではもったいないので授業のかたちにできないか。それで，総合科目という柔軟な，何をやってもよろしいという授業の枠があったので，そこで中国短期留学と銘打ちまして，学生は旅費を出すがあとの世話は私がする。向こうで懇意にしている天津社会科学院という機関が宿泊施設も手配してくれました。それから中国国内旅行の手配とか全部やってくれます。最初

の年は30人の学生を連れて旅行しました。それが評判を呼んで，次の年は150人ぐらい応募があったので，試験をしなくてはならなくなりました（笑）。以後，毎年，数十人ずつ連れて行きました。

ただ，毎年，全行程を私が引率していないと授業として成り立たない，それはちょっと大変だという問題がありますので，これも大学にお願いして，元からあった留学手続きに，施行細則というものを作っていただいて，学科長が許可すると，本人申請で留学できる。そして，外国で取得した単位を東工大の単位に振りかえることができる。そこで，この正規の留学手続きによって授業をすることにして，今年も間もなく三十数名出発する予定になっています。２週間ほど天津で授業を受けたり，現地の国営企業とか，開発区とかを見学して，最後に少しの西のほうを旅行して内陸のほうに行く，こんなようなことです。こういうようになるべくいろいろな機会を作りたいというのが，私が東工大で心がけていることです。

３番目に「清華大学との交流計画」をお話しします。清華大学の学長，副学長が東工大へもお見えになり，こちらの学長，副学長も清華大学を訪問したり，過去いろいろ交流がありました。清華大学が４，５年前にやはり学内の大革命をしました。そのときに東工大も参考にしたんです。それ以来，私はお付き合いしています。清華大学はもともと理，工，文の三つを柱にする総合大学でした。ところが，革命後，ロシアの方式にならって，文の部分の哲学とか法学，そういうものをあらかた北京大学に移管してしまいました。そして，理工系の単科大学になりました。これを元の姿に戻さないと，これからの改革開放の時代にうまくいかないという声があがって，文の部分をいま新たに建設中です。例えば法学院というものをつくりました。人文社会学院も作りました。公共管理学院というものもつくりました。これはMBAを出すような感じのところです。ハーバード大学のケネディ行政学院をまねしたものです。そして，MPA（Master of Public Administration），これはお役人のための学位ですが，そういうものを修士号として出す大学院を作りました。あと，朱鎔基首相が院長をついこの間まで務めていた経済管理学院があります。そうそうたる文系の大学院がキャンパスのわきに，大きなビルでどんどん建っています。そんなふうに，東工大を上回る勢いで，いま総合大学に脱皮中です。

その清華大学と，文系学問の交流協定を結べないか。私たちのほうでも社会理工学という文系の組織を作ったわけですが，清華大学の公共管理学院と協定を結んで共同の研究をしたい。公共管理学院のプログラムというのは，何と５年後には中南海の高級官僚500人を毎年修士課程に迎えて，在職したままトレーニングして学位を授ける。こんなような発展中の公共管理学院の経験を学びまして，私たちとしても社会に貢献できる理工系をベースにした新しい政策科学，法律，政治，経済さまざまな分野の学問を総合した何かの活動ができないか，そういうふうに考えて学術振興会に学術交流計画を申請中です。これが認められると，毎年10人から20人が，10年間にわたって交流できます。合わせて100人から200人が互いに毎年行き来して，国際シンポジウムができたり，いろいろできるという，大変大きな計画です。これは何とかして実現させたいと思っています。

私のお話は以上でだいたい終わりですが，今日はお話しできなかった大学改革については，昨年の号になりますが，『論座』という朝日新聞社の雑誌に「大学を国から奪え」というタイトルで書いた論文があります。

それから，ハーバード大学のコンピュータを使った学部の教育プログラムについての紹介は『季刊　本とコンピュータ』という雑誌の去年の春号に「ハーバード大学　見たまま記」というタイトルで書きました。

それから，平凡社新書の『ヴォーゲル　日本とアジアを語る』という新刊ですが，ハーバード大学にいたときに親しくお近づきになって，それでインタビューしたものです。日本の教育，大学，日本研究，中国研究といった，さまざまな話題や，日本の政治家（歴代首相）のことも書いてありますが，最近の情勢についてアメリカ側の考え方をいろいろ聞いているという内容のものです。

もう一つ紹介します。これは東工大で今やっている授業を本にしたものです。題して，『世界がわかる宗教社会学入門』，学部２年生のために宗教社会学という授業をしていますが，この授業のときに配っているプリントをベースに，付録をつけて膨らませた本です。中身は，ユダヤ教，キリスト教，イスラム教，仏教，儒教，神道，道教，こういう基本的な宗教について，その論理構造を明らかにしています。外国人を手っ取り早く理解するためには，各国の宗教を理解することである。宗教というのはいわゆる公理系のようにできているので，前提とロジックがわかると，いろいろ派生命題が出てきて，さまざまなことが予測できるので，情報源として非常にいいんです。世界と付き合うなら，まず宗教を理解しよう。

いろいろとりちらかった活動になってしまいます，が，私は思いつく限り，少しでも東工大のためになるように，そして私はあまり自分の母校が好きではないものですから（笑），東工大のほうが好きですが（笑），そういうふうに思っています。